

## 武蔵野日曜集会 降誕節

## 愛の光

——ヨハネ伝第1章1～18節——

1994年12月25日

小池辰雄

霊言 太陽の光 天国人 霊人 キリストと一つ 愛の光 無的実存 無者キリスト

## 【ヨハネ1:1～18】

1 太初に言あり、言は神と偕にあり、言は神なりき。2 この言は太初に神とともにあり。3 万の物これに由りて成り、成りたる物に一つとして之によらで成りたるはなし。4 之に生命あり、この生命は人の光なりき。5 光は暗黒に照る、而して暗黒は之を悟らざりき。6 神より遣された人いであり、その名をヨハネという。7 この人は証のために来り、光に就きて証をなし、また凡ての人の彼によりて信ぜん為なり。8 彼は光にあらず、光に就きて証せん為に来れるなり。

9 もろもろの人をてらす真の光ありて、世にきたれり。10 彼は世にあり、世は彼に由りて成りたるに、世は彼を知らざりき。11 かれは己の国にきたりしに、己の民は之を受けざりき。12 されど之を受けし者、即ちその名を信ぜし者には、神の子となる権をあたえ給えり。13 斯る人は血脈によらず、肉の欲によらず、人の欲によらず、ただ神によりて生まれしなり。14 言は肉体となりて我らの中に宿りたまえり、我らその栄光を見たり、実に父の独子の栄光にして恩恵と真理とにて満てり。15 ヨハネ彼につきて証をなし、呼わりて言う『わが後にきたる者は我に勝れり、我より前にありし故なり』と、我がかつていえるは此の人なり』16 我らは皆その充ち満ちたる中より受けて、恩恵に恩恵を加えらる。17 律法はモーセによりて与えられ、恩恵と真理とはイエス・キリストによりて来れるなり。18 未だ神を見し者なし、ただ父の懷裡にいます独子の神のみ之を顕し給えり。

## ● 霊言

1 太初に言あり、言は神と偕にあり、言は神なりき。

「言」というのは「ロゴス」という字ですが、

「太初に言があった」



というと、普通の人は何事かと思う。

「言は神であった」

という。ところが、この「言」という字は定冠詞が付いていて、「ホ・ロゴス」となっていて、そこらの言葉と違う。「ザ・ワード」「ダス・ヴォルト」です。これは神の言ですから、普通の言葉ではない。霊言です。

「太初に霊言があった」

ということですよ。

「言は神と偕にあつた」

とある。「偕に」というのは、あるいは

「向かい合つて」

とも訳される。神さまは見えない。見えない神です。エックハルトも

「もし、見える神があつたら、それは神さまではない」

と言つてます。我々には神は見えない。いくら冥想してもダメだ。ところが、神さまを見るようにしたひとがある。即ち、神の現象体です。これが、今日我々がお迎えしたナザレのイエスです。イエスが神の現象体なんです。

「言が肉となつた」

という言葉があるでしょ。

14 言は肉体となりて我らの中に宿りたまえり、我らその栄光を見たり、実に

父の独子の栄光にして恩恵と真理とにて満てり。

とある。

私が前にこのところを自分で訳した文章がある。

「初めに霊言があった。霊言は神のみ許にあつた。霊言は神であつた。彼は初めに神のみ許にあつた。ものみなは彼によつて成つた。成つたもので彼によらないで成つたものは一つもなかった。彼には生命があつた。この生命は人々の光であつた。この光は闇の中に輝いた。闇にはこれが分からなかった。一人のひとが現れた。神から遣わされた人でその名はヨハネといった。彼は証のために来た。その光について証しするためであり、すべての人が彼によつて信ずるためである。彼自身は光ではなかったが、この光について証しするためであつた。

万人を照らす真の光があつて、世に來臨した。彼は世にあつた。世は彼によつて成つた。しかも世は彼を知らなかった。彼は彼の族に來たのに、彼の族は彼を受け入れなかった。およそ彼を受入れたものには、即ち彼の名を信じたものには、神の子たるの權威を彼は与えた。これらのものは血筋からではなく、肉の願いからでもなく、人の意欲からでもなく、ただ神から生まれ

たのである。しかも、ことだま言霊は肉となって我らの中に幕屋を張った。我らは彼の栄光をみとめた。父の独子の栄光で、恵みと真まことに満ちていた。」(ヨハネ1:15-18)

そういうように訳した。

## ●太陽の光

マリヤはヨセフを知らない——肉的な交わりをすることを「知る」という——のに子供が生まれる。それをマリヤは分からない。そうしたら、御使が、

「**懼れるな、これは御霊によるものである。御霊が汝をおおった**」

と言った。だから、イエスは普通の生まれ方をしたひとではないわけです。マリヤが聖霊によって身ごもった。普通では考えられない。聖徳太子の生まれ方がちよつとそれに類似したような神話があるけれども。聖霊によって子供が生まれたから、正にイエスは、御霊の力による子なんです。マリヤは普通の女ですけれども、聖霊の力でもって子を産んだ。実に普通の我々の思いおよぶことのできない現実です。

今日の題に『愛の光』と書きました。今、太陽の光が照っていますが、聖霊は、もし言うなら、太陽の光みたいだ。月の光は冷たい。月のことをドイツ語では「デア・モーン」といって男性名詞です。ところが、太陽は「デイ・ゾンネ」といって女性名詞なんです。あまてらすのおみかみ天照大神も女性だ。暖かい愛の光ということ。あるときは、それが非常に熱い。焼きつくすような熱さをもっている。太陽の光は月の光とちがう。太陽の光は生きとし生けるものをみな活かす。草を生えさせる。とにかく、花が咲き実が稔るのは全部これは太陽のしわざです。お天道さんというものは大変なものです。

ヨーロッパに行くと、北の方は、ノルウェーとかスエーデンとかは非常に太陽の光がうすい。だから、お天気になるとみな喜んで日光浴をするわけです。アフリカあたりへ行くと、今度は逆に太陽の光が強すぎて困るくらいですが。しかし、日本みたいに温帯地方は非常にその点が恵まれています。熱すぎもしなければ薄くもない。日本の国は非常に恵まれた国です。

朝、朝日が出てくると、太陽に拝むひとがある。結構なことですよ。とにかく、恵みを何とも思わないで、普通のようにしているのは本当はダメなんです。普通の人は何とも思わない現象に対して、それを非常に驚きと喜びをもつて受ける。そういう魂でなければいかんというようなことは、ゲートルも言っています。ゲートルやダンテというような人は、非常に感受性の豊かなひとです。

## ●天人

ところが、また別なところで、我々が今日お迎えするところのイエス・キリストは「言



「逆らいの徴」であるという言葉がある。クリスマスに生まれてきたキリストは、大変おめでたい人かと思つたら、どっこいそうではない。「言い逆らいの徴」だという。人には言い逆らわれる、ユダヤ人には退けられる。キリストを本当に受けとる人は少ない。大衆は、受けとつたと思つたら、背いたりする。本当のキリストを受けとつた人はごくわずかだ。「言い逆らいの徴」は結局、十字架なんです。生まれからしても、「言い逆らいの徴」なんて言われている。罪の世には言い逆らわれるのが本当の天国の人なんです。彼は天国人です。

### 「神の国は汝らの中にあり」

とキリストが言われた。私たちも天国人でなければクリスチャンではない。その人のいる所には、何だか知らないけれども、非常に暖かい、人を助ける光がそこから射している。そういう愛の光がないものはクリスチャンではない。聖書の研究ばかりやっているのはダメなんだ。聖書研究会なんかすると、聖書の本当の世界から遠ざかってしまう。聖書身、読会ならいい。聖書を身体からだで読む。

日蓮が佐渡に流される時に弟子に、

「お前は法華経を身体からだで読め」

と言つた。さすがは日蓮だ。目で読むのでもない、ただ心で読むのでもない、全存在で読め、身体で読めということ。聖書を身体で読まなければ、聖書の世界には入れない。自分の身体を聖書の現実の中に投げ入れる。聖書は靈たまご的な現まの世界ですから。

創世記から黙示録にいたるまで、どんなに昔の神話的な事が書いてあつても、それは神話ではない。神話的表現をもつた本当の現実が語られている。

「これは神話だから、歴史ではないから」

なんて言つて、すごい加減にしてしまう。そうではない。神話的表現で、相対的な歴史よりももっと凄い現実を示しているのが、この聖書の世界なんです。相対的な現実ではない。根源現実、根源的な現実です。だから、聖書を読んでいて、聖書に圧倒されて読まなければ、本当は読んでいるのではない。

「参りました！ 降参しました」

と云つて聖書を読まなければ。また、降参すると、その現実の中に入れられる。

「いや、凄いですね。うれしくてしょうがない、力が来てしょうがない、光が来てしょうがない」

と、そういう読み方をしなくては。

神の根源語というのはギリシヤ語でもヘブライ語でもない。日本語で結構です。その日本語の奥の、神の言そのものを、響きを——響きの世界、靈的な音楽の世界だ——聞かなければいかん。



## ● 霊人

キリストは十字架に架かって、それで死んだと思つたらどっこい、復活してしまつた。甦つた。霊体として現れた。パウロが、

「血気の体あり、霊の体あり」

とコリント前書15章で言っている。あれを、パウロが言っているとおり、キリストは実証してしまつた。霊体で現れた。大変なひとだね。

ナザレのイエスは聖霊によつてマリヤから生まれてきた。彼はもともと霊人、霊の人なんだ。普通のご飯を食べますよ、泣いたり笑つたりしますよ。ところが、本質は霊なんだ。相対的人間小池はもう十字架に架けられてしまつて、キリストが、

「お前は相対的な存在の奥に滅びないところの霊人として、お前を新しくしたぞ」と言われる。「人新たに生まれる」とはそのことです。

「人新たに生まれずば、神の国を知ること能わず」

という。皆さんもお一人ひとり、霊人です。

「信仰」なんていう言葉は言わなくていい。「信じ仰ぐ」なんていらぬ。

「受けとつている、体受している、身体で受けとつている」

ということが大事です。私はキリストを体受しています、信じていません。

「キリストは神の子である」

ことを信じたつてどうにもならない。私はキリストと一つになっています、一如です。人間小池は躓いたり転んだり、バカ言つたり、いろいろなことをしています。けれども、このバカ野郎の中にバカでない世界がある。それはキリストと一如にされているところの霊的な現実なんです。現実体、霊体なんだ。

「信仰」なんかしてない。

「キリストを信じていますか？」

なんて聞かれたら、「信ずる」ではなく、

「私はキリストと一つです」

と答えてやりなさい。

「このガラクタが、この破れ器がキリストと一つなんです」

と、これがおつきりと言えなければダメです。

「人間小池がどうである」

と勝手に言つてください、そんなことはどうでもいい。ところが、

「私の根源の現実にはキリストと一つです。あなたにはそれが見えないだろう。しよ

うがないね、あなたがキリストと一つになつていれれば見えるよ」

と、それくらいのことを言つてやりなさい。だから、力が来しようがない、ありがたくてしようがない。本当ですよ。



私はこういったことを一遍、テレビで一席やりたくらいだ。

「これはとんでもない野郎だな」

と、聞くひとはみな思うだろうね。もったいぶったようなクリスチャンなんかもうごめんだよ。皆さんは、もし私を見たら、私の後ろに、あるいは私の中にキリストさまを見てく  
ださい。

とにかく、イエス・キリストというひとは大変なひとです。「クリスマス」というのは一  
体何ですか。「クリストス・メッセ」という。本当の意味におけるお祭です。このお祭はキ  
リストの御名を讃える。我々が、

「主さまー」

と身体の中で無言の叫びをする。そうすると、その叫んだ瞬間に、キリストと一つになら  
なければダメですよ。寝るときも、「主さま」と言いつて寝たらよく寝れる。時々、不思議な  
夢をみる。集会の夢を先にみたりする。

### ●キリストと一つ

13 斯る人は血脈によらず、肉の欲によらず、人の欲によらず、ただ神により  
て生まれしなり。

「よりて」という訳はよくない。「神から生まれた」ということです。

14 言は肉体となりて我らの中に宿りたまえり、我らその栄光を見たり、実に

父の独子の栄光にして恩恵と真理とにて満てり。

「恩恵と真理」という言い方が時々でてくるね。キリスト自身が恵みの主体なんです。何か  
恵まれるのではない。キリスト自身と一つになることが本当の恵みの世界、恵みを受けと  
っている世界です。「真理」とは、単なる理屈ではない。真理という言葉は観念的になる。  
私はこの「まこと」を根源現実と言う。相対的な現実ではない。根源現実は無滅びない消え  
失せない現実です。

虹は七色に光っている。あれはなにも七色ではない。物理的法則で七色に見えるのだけ  
れども、あれはみな色のない水滴だ。色のない水滴が太陽の光を受けると、七色に光る。

ここにいろいろな花がある。花の色も形も香もいろいろだ。ところが、受けとるものは  
太陽の光だけです。太陽の無色の光を受けとつていろいろに咲くのですから、これは不思議  
なものだ。造化の妙というのは大変なものだ。

人間の顔もみな違う。類型的なものもダメなんだ。A君というのは天下に一人しかいない。  
この顔は、いくらまねようとしたって、真似るわけにいかない。そういう、天下に一つと  
いうのが本当の人格というものです。人真似はひとつもいらぬ。みな特殊性がある。神  
さまは同じものを造らない。我々一人ひとりみな、世界中を探しても同じ人はいないわ  
けだ。大変なものだ、神さまの造り方というものは。だから、人真似をしたらダメなんだ。



人真似をしたら自分を失ってしまふ。西田幾太郎という哲学者が、

「我はわが道をゆく」

と言った。そのとおりです。

皆さん一人びとりは天下一品ですよ。神さまに創造されて、そこで現れる光は、キリストの光が現れる。人の目には見えなくても、あなた方はキリストの光を宿している。それがクリスマスチャンだ。キリストの光を宿さないのはひとつもクリスマスチャンではない。

「キリストを信じてます」

なんて、信じる必要はひとつもない。

「キリストと、一つですよ」

ということですよ。この「信仰」という言葉はやめたほうがいい。

「私は何も信じていません」

と言ってやる。びつくりするだろうね、普通のクリスマスチャンは。

「あなたはキリスト教ではないんですか」

「いえ、私は信じていませんよ、私はキリストと一つになっているだけのはなしです。私の中のキリストが見えませんか、ダメですね」

と、それくらいのことをはつきり言えなくては。クリスマスのキリストが、

「そうだ、その通りだ。お前は本当のことを言っている。もつたいぶつたことを言

ってない」

と言っておられますよ。

「神によりて生まれた」

とは、私たちは神から生まれた者で、キリストの言を活ける言としてくらっている。解釈しているのではない。説明なんかしているのではない。聖書解釈や聖書註解なんてひとつもいらない。聖書身読でいい。身体で読む。聖書の言の奥にそういう響きを受けとらなくては。聖書を二冊持っていたら、一冊は頁を破り取って、自分の好きなどころをポケットに入れて、電車の中でもどこでもそれを読む。それくらいのこととはした方がいい。

## ●愛の光

ルカ伝1章26節から、

「<sup>26</sup>その六月めに、御使ガブリエル、ナザレというガリラヤの町におる処女のもとに、神より遣さる。<sup>27</sup>この処女はダビデの家のヨセフという人と許嫁せし者にて、其の名をマリヤと云う。<sup>28</sup>御使、処女の許にきたりて言う『めでたし、恵まるる者よ、主なんじと偕に在せり』<sup>29</sup>マリヤこの言によりて、心いたく騒ぎ、斯る挨拶は如何なる事ぞと思ひ廻らしたるに、<sup>30</sup>御使いう『マリヤよ、懼るな、汝は神の御前に恵みを得たり。<sup>31</sup>視よ、なんじ孕りて男子



を生まん、其の名をイエスと名づくべし。

この御使は大変なものだね。

32 彼は大ならん、至高者の子と称えられん。また主たる神、これに其の父ダビデの座位をあたえ給えば、33 ヤコブの家を永遠に治めん。その国は終ることなるべし』

こういう言葉は成就しない。「国」と言つたつて、イエスの国はここに言っている国ではない。

34 マリヤ御使に言う『われ未だ人を知らぬに、如何にして此の事のあるべき』

35 御使こたえて言う『聖霊なんじに臨み、至高者の能力なんじを被わん。

これです。

此の故に汝が生むところの聖なる者は、神の子と称えらるべし。

聖霊によつて生まれるのだから、これは「神の子」だと。

36 視よ、なんじの親族エリザベツも、年老いたれど、男子を孕めり。石女といわれたる者なるに、今は孕りてはや六月になりぬ。37 それ神の言には能わぬ所なし』38 マリヤ言う『視よ、われは主の婢女なり。汝の言のごとく、我に成れかし』 ついに御使、はなれ去りぬ。

ここところは素晴らしい。なぜマリヤが選ばれたか、そんなことは書いてない。とにかく、聖霊によつてキリストは生まれた。特別な生まれ方をイエスはなされたわけでは

39 その頃マリヤ立ちて、山里に急ぎ行き、ユダの町に到り、40 ザカリヤの家に入りてエリザベツに挨拶せしに、41 エリザベツ、その挨拶を聞くや、兒は胎内にて躍り。エリザベツ聖霊にて満され、42 声高らかに呼わりて言う『おんなの中にて汝は祝福せられ、その胎の実もまた祝福せられたり。43 わが主の母われに来る、われ何によりてか之を得し。44 視よ、なんじの挨拶の声、わが耳に入るや、我が兒、胎内にて喜びおどれり。

凄いね、これは。

45 信ぜし者は幸福なるかな、主の語り給うことは必ず成就すべければなり』

「信ずる」というのは、まこととして受けとるといふことです。

46 マリヤ言う『わが心、主を崇め、47 わが霊は、わが救主なる神を喜び奉る。

48 その婢女の卑しきをも顧み給えばなり。視よ、今よりのち万世の人、われを幸福とせん。49 全能者、われに大なる事を為し給えばなり。その御名は聖

なり。50 その憐憫は代々、畏み恐るる者に臨むなり。51 神は御腕にて、権力をあらわし、心の念に高ぶる者を散らし、52 権勢ある者を座位より下し、卑しき者を高うし、53 飢えたる者を善きものに飽かせ、富める者を空しく去らせ給う。54 また我らの先祖に告げ給いし如く、55 アブラハムと、その裔とに對する憐憫を、永遠に忘れじとて、僕イスラエルを助け給えり』(ルカ1・26



55)

キリストは光の子だけでも、光は愛の光です。キリストの愛は一樣ではない。いろいろな現れ方をしている。あるときは、怒ったりする。その怒はまた愛の別な現れ方なんです。これはルッターもそういうことを言っています。根源はみな愛なんです。その愛から——愛の現れ方はいろいろです——人を躓かせたりすることがある。けれども、それは本当は愛なんだということです。我々は人生でいろいろな経験にでつくわします。けれども、究極的な意味では、それをキリストの愛として受けとらなくてははいかん。日常の体験でもそうです。

「隠れたキリストの愛が働いている」

と言って受けとっていく。「しょうがないな」なんて思いつて、それはしょうがない。本当はキリストの愛なんだ。そういうように、大乗的な受けとり方をしたら、それは本当に楽になる。

### ● 無的実存

その人はあらゆる事に対して本当に勝ちます。勝つというのは敵を倒すことではない。実は、本当は敵なんかいない。無敵なんだ。全部、人を包んでしまう、担ってしまふ。何と言われようと、一向差し支えない。抗弁する必要はひとつもない。弁解する必要もひとつもない。そういうようなところは、それは本当の巨人なんです。本当の巨人というのは一切を受けとってしまう、

「ああ、結構でございます」

と。行き詰まりを知らない人になる。問題があつて問題がなくなつてしまふ。何がどうなつたつて一向差し支えない。相対的に何のかんの考えていたら、それこそ思い煩いでダメになる。

「汝ら、思い煩うなかれ」

とキリストが言われた、

「どうだつていいじゃないか」

と。それが本当の無的実存ということです。「実存」とはドイツ語の「エクジステンツ」という言葉です。英語でいうと「リアル・ビーイング」とでも言おうかな。

ヨハネ伝の1章のところは素晴らしいところだ。

9 もろもろの人をてらす真の光ありて、世にきたれり。10 彼は世にあり、世は彼に由りて成りたるに、世は彼を知らざりき。

聖書で「知る」という言葉は、頭で知るのではない。全存在で体認する。身体でもって受けとることです。

11 かれは己の国にきたりしに、己の民は之を受けざりき。12 されど之を受け



し者、即ちその名を信ぜし者には、神の子となる権をあたえ給えり。<sup>13</sup> 斯る人は血脈ちすじによらず、肉の欲ねがひによらず、人の欲ねがひによらず、ただ神によりて生まれしなり。<sup>14</sup> 言ことばは肉体となりて我らの中に宿りたまえり、

「宿る」とは「幕屋を張る」という言葉です。

我らその栄光を見たり、実に父の独子ひとりごの栄光にして恩恵めぐみと真理まことにて満てり。よく書いてあるね。キリストは神さまのことを「父よ」と呼んだ。

「では、お母さんはどうしたか」

なんて——この「父よ」というのは、そんなことを言っているのではない。

「大地は母である」

という言葉があるが、霊的な次元でのことです。「天」というのは素晴らしい言葉だ。漢字というのはい。」「天地」という。「新天地」なんていう言葉が黙示録に出てくるけれども。

<sup>15</sup>ヨハネ彼につきて証をなし、呼わりて言う『わが後にきたる者は我に勝れり、我より前にありし故なり』と、我がかつていえるは此の人なり』<sup>16</sup>我らは皆その充ち満ちたる中より受けて、恩恵めぐみに恩恵を加えらる。<sup>17</sup> 律法おきてはモーセによりて与えられ、恩恵めぐみと真理まこととはイエス・キリストによりて来れるなり。<sup>18</sup> 未だ神を見し者なし、ただ父の懐裡ふところにいます独子ひとりごの神のみ之を顕あらわし給えり。

と、はつきり書いてある。このイエスだけが本当に神さまの現象体であると。まあ、大変なひとだ。神さまが現象したイエスは正に無的実存なんです。自分は何でもない。

「我は何事をも為しあたわず」

と彼ははつきり言っている。

「<sup>54</sup>イエス答えたもう『我もし己に栄光を帰せば、我が栄光は空し。我に栄光を帰する者は我が父なり、即ち汝らが己の神と称うる者なり。<sup>55</sup> 然るに汝らは彼を知らず、我は彼を知る。』

「お前さんたちが自分たちの神はアブラハムの神さまだと言っているけれども、本当は分かっているのではないか」とキリストにやつつけられている。

もし彼を知らずと言わば、汝らの如く偽者いつはりたるべし。然れど我は彼を知り、且その御言を守る。<sup>56</sup> 汝らの父アブラハムは、我が日を見んとて楽しみ且これを見て喜べり』<sup>57</sup> ユダヤ人いう『なんじ未だ五十歳にもならぬにアブラハムを見しか』<sup>58</sup> イエス言い給う『まことに誠に汝らに告ぐ、アブラハムの生まれいでぬ前まへより我は在るなり』

神さまと一緒にいたのだから、アブラハムどころではない、もっと先にいたと。

<sup>59</sup>爰こゝに彼ら石をとりてイエスに擲なたんと為したるに、イエス隠れて宮を出で給えり。』（ヨハネ8・54～59）

彼らはイエスを気違いと思った。イエスは隠れて宮から去った、と面白いことが書いてある。



とにかく、次元が違うものだから、言うことがみな分からない。

そういうキリストが聖霊によってマリヤの子として地上に現れた。イエスは始めはヨセフのお手伝いをして、大工仕事なんかをしたらしい。けれども、彼はもう少年時代から祈っている。12歳のイエスがお宮で祭司たちと問答をしたって、祭司たちはこの12歳のイエスにかなわないんだ、

「どこからそんな智慧を得たか」

と。霊界から来ているんだ、12歳のイエスに。

### ●無者キリスト

どうぞ、皆さんもとにかく、キリストと一つになつてくださいますよ。キリストの方から一つにしてくださいますから。こつちから努力する必要はない。自分を開放していると、キリストは入ってくる。こんな楽なことはない。こんな楽でありがたいことはない。これが本当の無の世界、無的実存なんです。こつちはゼロなんだ。こつちはゼロで、無限大になつたひとがある。これはキリストなんです。キリストは自分は何ものでもない。そうすると、神さまという無限大が彼の中に入ってきた。だから、

「我を見しものは父を見しなり」

とはそのことなんです。

「父なる神が私の中に入ってしまったから、しようがないじゃないか。自分は何でもないよ」

と。

「我れ何事をも為し能わず」

と、これが無的実存です。無だから無限無量になる。無でないと、サムシングではダメなんです、ナッシングでなければ。ナッシングだと、これが無限無量になる。ドイツ語でいうと「ウンエントリツヒカイト」だ、「終りを知らず、際限なし」ということ。

普通の、小学校の先生も中学の先生も、高等学校、大学の先生も、本当のそういう世界を持っていないからダメだ、本当の教育ができないんだ。

本当の真理を文学的に表現する人が本当の詩人なんです。世界の第一流の詩人はそうだ。みな霊的だ。

ここにフェルシュテージェンという人のドイツ語の詩がある。

「私はキリストに現れた愛の力に祈る。

その愛の力で私は愛されてきた。

私は自分のことを考えるかわりに、

この愛の大海に自分を沈めていく。」

これはいい詩だね。



「ゼロ＝無限大」

ということ。私たちを本当にキリストの十字架がゼロにしてくださいっただんです。

「お前は――過去・現在・未来の人間小池というダメな野郎は――全部、ゼロにしてしまった。心配するな。その代わり、無限大を入れてやる。相対的な人間小池なんか問題じゃない。無者だ」

と。キリストは無者だったから、だから私は

「無者キリスト」

と書いた。神が一切だから無者なんだ。「無者キリスト」なんて、そんな表現する人は世界中にいないだろうね。だから、本当はキリストが分かっている。キリストはゼロなんだ。「ゼロ＝無限大」なんだ。十字架で私はゼロをいただいた。自分で悟ってゼロになったのではない。よく、禅宗では「悟り」というが、悟る必要はない。

「ゼロ、無の世界はいただきました。そうしたら、力が来て仕方ありません」ということです。

90歳で自転車でグルグル乗り回している人はいるかい。私はそうなんだ。一向差し支えない。自分で90歳だなんて思っていない。大体、70歳くらいにしかみえない。私は永遠の青年なんだ。本当の「青年」とは魂がいつまでも若いひとだ。歳が何歳であっても、そんなことは関係ない。90歳であろうと、百歳であろうと、魂が若い人は青年なんだ。ところが、20歳でも30歳でも、魂が若くないのは老人だ。どうぞ、皆さん方はキリストにあつて永遠の青年・少女であつてください。

芸道であろうと何であろうと、何をやっていても、皆さんはそこでもってキリストの証し人、キリストの証人なんだ。証者ということ。我々が迎えているクリスマスはそういうクリスマスだ。

祈ります。

主イエス・キリストさま。今日は、アブラハムより先に在りしあなたがこの地上に御霊の力をもって現れ給いました、誠に驚くべきご降誕であります。あなたを本当に私たちは聖霊にあつてお迎えし、そして、また聖霊にあつて讃美してまいります。この兄弟姉妹たちと共に、この不思議なあなたのご降誕をお迎えし、朝から夕方にかけて、どうぞ、あなたの恵みと真をもって満たしてくださいように願ひ奉ります。尽くしませんが、兄弟姉妹たちの全身にある言葉にもならない言葉を通して、主イエス・キリストの御名にあつて捧げ奉る。アーメン

